

大宰府アカデミー・令和編 第10講 令和6年1月17日(水)質問及び回答(Q&A)

「古代大宰府の仏教美術」

講師・回答：井形 進先生(九州歴史資料館学芸研究班長)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 講座では、仏像の造像には金銅仏、塑像、乾漆像、木彫（一木造、寄木造）等があり、奈良時代に塑の技法から彫の技法へ転換したという説明がありましたが、その理由は为什么呢。

A/ 回答

おっしゃる通り奈良時代の末に、日本彫刻史は撚塑的技法から彫刻的技法へと主たる技法が大きく転換しています。その転換点に位置しているのは檀像です。狭義の檀像は、香木である白檀の一材から像の全てを細部に至るまで緻密に彫り出して、香りを生かすために彩色を施さないものを言います。ただし白檀は東アジアでは産出せず、また大きくは育たないので小像しか造れません。そこで唐時代の中国で、白檀の代用材として栢木を用いてもよいとされました。これをもって材の調達がより容易になり、大きな像も造ることができるようになったのです。奈良時代の末に、この栢木を用いた広義の檀像が、唐から渡来した鑑真の周辺で造られ始めます。ちなみにここでは栢木は榿だとされたようで、唐招提寺に遺る鑑真が伴った中国人仏師が造像したと考えられる仏像は、腕等を除いて一本の榿材から彫出されています。鑑真がもたらした新しい信仰と造形の世界は、奈良時代の末の日本における信仰と造形の世界に大きな刺激を与え、唐招提寺の栢木檀像を起点としながら、榿材製で一木造の仏像が広く造像されるようになってゆきました。ただしこの時、鑑真の影響の大きさはもちろんですが、日本に古来あった樹木の聖性への意識なり、木工技術の伝統も意識しておく必要はあると思います。もとより、飛鳥時代にも木彫像は制作されており、撚塑的技法全盛期の奈良時代においても脈々と造り続けられていました。そのような伝統が、檀像思想なり鑑真の存在に刺激を受けて再び存在を大きくしたことも想定できます。いずれにしても、檀像を転換点と起点としながら、平安時代前期の榿材製で一木造の仏像の時代が始まったと言えます。そして木彫像、彫刻的技法は、平安時代後期以降は桧材製の寄木造の仏像が主となりながら、現代に至るまで造像技法の主流として続いているのです。

Q/ 梵鐘、銅鑄仏像などの鑄造工房はどこにあったのでしょうか。

A/ 回答

観世音寺梵鐘、観世音寺創建期の金堂主尊である銅造丈六阿弥陀如来像ということだと、はっきりと押さえてお答えすることができません。ただ一般的に、そのような大型の鑄造品は安置場所の近くに工房を設けて鑄造することが多いようですし、観世音寺境内周辺だろうとは思っています。ちなみに、観世音寺の発掘調査の成果によると、境内の東側や南東側から奈良時代の鑄造に関わる資料が見出されていますし、また鑄造に関わるものに限らず様々な出土遺物から、境内の東側には観世音寺の造営や仏像の造像などに関わる工房が存在していたのではないかと推定されたりもしています。ですので、飛鳥時代や奈良時代に大型の鑄造品を制作したのも、安置場所の直近でないならばそのあたりかな、と私は想像したりしています。

Q/ 講座を聴いて、都に直結しながらも大宰府らしい仏教文化を創造したことがよく分かりましたが、その大宰府らしさの特徴はなんのでしょうか。また、堂々たる丈六仏を何体も造像することができたのには、どのような要素が必要だったのでしょうか。

A/ 回答

都に直結していながら、大宰府の周辺で都とは異なる仏教文化が開いた背景としては、それを創造する場において、都のこのみならず太宰府の地の伝統も自然に、あるいは大切にされながら意識的に、反映されたということが考えられるのではないかと思います。ただしこの、都からの影響と在地の伝統という二つの要素ならば、太宰府の地のみならず、都以外の地方においては何処でも見受けられたことです。もちろん、それぞれの地で在地の伝統のあり方は異なりますし、都の影響の大小やその内容も異なりますので、結局どの地方においてもその地方らしい仏教文化が形成されるということにはなると思うのですが。それで、大宰府らしさを形づくった他地方にない要素と言えればやはり、なにより大陸と向き合う場にあるということからくる、大海の向こうにある世界への意識や、中国や朝鮮半島の国々をはじめとする異国との実際の交流を考えるべきだと思います。他にない意識は他にない造形を生みますし、交流すれば必ずお互いに多かれ少なかれ影響を受けます。大宰府周辺の仏教文化の他にはない個性は、都からの影響、大陸からの直接的な影響、在地の伝統の三要素が絡み合いながら、その時々その場その場の造形に結晶することから生まれていると考えています。具体的な様相については、それぞれの作品や作品が所在する場それぞれで、個

別に考えてゆくべきことだと思いますが、大宰府らしさの背景を端的に言うならば、他地方にはない要素をもち、彩りが一段と豊かであるということになるかと思いません。

あと、丈六像を何体も、しかも最新の作風と技法で造像することができたことについては、まずは大宰府周辺にそれを可能にする充実した工房の存在がなければなりません。そして現存作例に加えて史料からも、事実それは存在していたと考えることができるのですが、ではそのような工房が存在することができる背景です。高い造形の水準を維持しながら大規模な造像を継続してゆくことには、並外れて充実した人的環境や経済力が必要になります。このことについても、時代によって作品によって個別具体的に考えてゆかねばなりません。しかしいずれにしても大づかみに言うならば、やはり大宰府の大きな力と都直結のあり方を想定すべきだと思います。古代九州において大宰府の存在は、極めて大きな意義をもっていたのだと思います。

※ ご質問ありがとうございました。